The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	出原隆俊先生をお送りする
Author(s)	斎藤, 理生
Citation	阪大近代文学研究. 2017, 14-15, p. 103-104
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/67762
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

出原隆俊先生をお送りする

斎藤　理生

二〇一七年三月をもって、出原隆俊先生が大阪大学大学院を定年退職される。

先生が着任されたのが一九八九年四月。大阪大学における本格的な日本近代文学研究は、このときから始まった。

「阪大近代文学研究」が創刊されたのが二〇〇三年三月。先生が巻頭論文を執筆された。わたしが編集を務めた。

ふり返れば、わたしが入学して一年後、国文学専攻（当時）に加わったのが一九九五年で、大阪大学に着任し、〈同僚〉となったのが二〇一四年である。

かれこれ二二年、公私にわたってお世話になっていることになる。

当然、多くの恩があり、思い出がある。

しかしそのひとつひとつを、このような公的な場に記すことは慎みたい。先生も、面はゆいお気持ちになられるだろうから。

ただ一点だけ、御講義をうかがって興味を持ち、図書館で探して拝読した「洋行と〝からゆき〟―反『舞

姫』小説の位相―」（「文学」一九八五・三）の感銘だけは書いておきたい。
一面でしか捉えていなかった文学の歴史に、複数の層があることを教えてもらったと思う。
知らず知らずの内にとらわれていた窮屈な枠を取り外して、広い場所へと連れ出してもらった感覚。
その悦びを知らなければ、わたしが研究の道を歩むことはなかった。
きっと多くの先輩、後輩たちにも、同じような体験があったにちがいない。
特に博士前期課程の頃、身の丈に合わない、格好を付けた表現を、よく叱正された。そのことを深く感謝している。
あの頃に御指導をいただけなければ、わたしの論文は、今よりももっと稚拙で、〈賞味期限〉の早いものになっていただろう。
全体を丁寧に読むこと。徹底的に調べること。
教えていただいたことは数多いが、最も重要なことは、容易に言語化できない、感覚的な部分だという気がする。
研究を進めてゆく上で、これはおかしいのでは？　と気づく瞬間。予感。抵抗。
その感覚は、大阪大学で日本近代文学を学んだ全員に共有されていると思う。
ご退職に伴い、謦咳に接する機会が少なくなってしまうことは事実である。
しかしこれからも、先生の元で培った感覚に導かれつつ、わたしたちは論文を書く。